図版解説

原田直次郎筆　素尊斬蛇画稿

三輪英夫

本図は、原田直次郎（一八六三―九九）が明治二十八年京都で開催された第四回内国勧業博覧会に出品し、妙技三等賞を得た「素尊斬蛇」（高田慎蔵旧蔵、焼失。挿図2）の画稿ないしは下絵にあたるものである。画布に油彩で描かれ、竪七七、五、横五三・三糎の竪長の画面で当初からと考えられる額装が施されている。木枠に墨書（挿図1）があり、右から「素戔嗚尊八岐大蛇退治畫稿」「原田直次郎先生筆」「本畫ハ関東震災ニヨリ焼失有島生馬鑒」と読める。現在岡山県総合文化センターの蔵品であり、昭和五十五年四国在住の原田家子孫から入手された由である。画面の現状は、近年の修理で洗浄と画布の補強等が行われているため全面にわたる絵具の亀裂が固定され、剝落等の損傷もなく褪色の様子もさして感じられない。

画稿にあたる本図を敢えてここで紹介するのは、完成作が焼失しており、従来、森鷗外らの尽力で刊行された『原田先生記念帖』（明治四三年、参考文献抜参照）によってその図様を確かめ得るのみで、発表当初の文献等にもこの作品の内容に関わるものが見出せないからである。しかも、完成作は明治二十年ドイツ留学から帰国後の原田の二大構想画の一つにあたること、即ち、明治二十三年の第三回内国勧業博覧会に出品し、外山正一、森鷗外による有名な画題論争の対象となった「騎龍観音」につぐ意欲作であり、従って、原田の画業の本質をなす主要な作例であるとともに、明治中期の西洋画移植における構想画の問題を考える上でも重要な意味を持っている。また、近年岡山大学の鐸木道剛氏により作品等の調査が行われているものの、原田自身が早世したこともありその遺作は極めて少なく、その意味でも本図は帰国後の原田の画技を推る上で有効な資料となりうると考えられる。

画題からも明らかなように、本図は高天原の諸神から追放された素戔嗚尊が出雲の斐伊川の上流鳥髪山に天降り、八岐大蛇を退治するという記紀の伝説に着想した神話画、歴史画である。この着想と主題に関して興味深いのは、「騎龍観音」と共通する竜（竜蛇）のモチーフであり、ここには十九世紀後半のドイツ的怪奇幻想趣味ないしは世紀末趣味の反映、あるいは共鳴が強く看取され、むしろそこから発したイメージが先行して主題を引き出したという側面もありえたように思われる。その意味では、「素尊斬蛇」は「騎龍観音」のヴァージョンでさえある。が、このことについては「騎龍観音」をめぐる諸問題として、その図像の源泉をも考察しながら次の機会に論じる積りである。

本図を一見して奇異に感じられるのは、主題とは無関係な小犬が、あたかも画布を裏から裂いて頭をのぞかせたかの如く描かれていることである。しかし、ここでは画稿であることから作者が竜蛇の絡みを描く表現上の苦心からいったんこの部分を中途で放棄し、後日一種の諧謔、ユーモアをもって加筆したと理解するに止めておきたい。構図は右上へ向う流動的対角線構図をとり、この動勢のなかにかっと眼を見開いた尊の視線と足下の竜蛇頭との対峙で緊迫感を表わし、左上にのぞく暗空もこれに呼応して立ち昇る動きを示している。色数は限られ全体に暗調で、ぬめりのある肌合いの竜蛇はくすんだ緑、尊の周囲の欝蒼たる叢林も同系統の緑、空は暗い灰青色を用い、怪しく不気味な雰囲気をかもす。その中で、額から右肩に沿って白衣にかかるハイライトが尊の姿を浮彫りにする。また、尊の左頭上と足下右から二頭目の蛇身に剣を受けた鮮血を朱色で塗り、尊と竜蛇との色彩的対照を際立たせる効果をつくり出している。これらの色調はおそらく完成作にも踏襲されたであろうが、「騎龍観音」とも共通するもので、特に暗緑色と朱色の対比は原田の色彩を特色づける要素のひとつといえるだろう。陰影は主に茶褐色で施し、動勢に沿って原田特有の斜行する鋭角的な筆致が随所に窺え、特に顔貌と白衣は強い筆触によっている。

次に本画稿と完成作の図版を比較し画稿から本画に至る幾つかの図様の改変について見ていきたい。両者の色彩は勿論、筆触の比較も出来ないが、顕著なのは構図上のそれである。完成作は、画稿に見る右対角線上への動勢のみで画面を構成することなく、より堅固で安定感ある構図へと改変している。即ち、前景に描き加えら

れた波立つ水面から頭をのぞかせ尊に向う六頭の竜蛇は、画稿のように互に激しく絡み合う形をとらず、尊を中心に略二等辺三角形を構成し、さらに、右端の竜頭は尊の踏んばる左足、尊の背後に蛇行する大蛇の背面の動きに対応し、画面左上にこれも描き加えられた山容へと導かれ、全体としては対角線構図の流動性と拡がりをも保っている。より安定した構図へのこの改変は、例えば尊の表現において、その動的姿態を一層定定させ、画稿の猛々しさからむしろ威厳ある整った顔立ちへと変えているように、個々のモチーフの表現へも波及している。

挿図1　素尊斬蛇画稿裏面

挿図2　原田直次郎筆　素尊斬蛇　明治28年

ところで、画稿はその性格からも速写性ある動勢とそれに相応しい筆触の張りを持ち、本画はより構築され整合されるのが一般的だとしても、右の様な改変は原田の場合それ以上の意味を持つように考えられる。それは、ここでの改変が単に作画上の問題ではなく、主題そのものに対する作者の態度の変容によるものであると思われるからである。少くとも、画稿においては作者の怪奇幻想趣味を反映したかの如く、竜蛇と格闘する人物というイメージそのものに絵画的関心が集約されているのに対し、完成作においては、竜蛇へのイメージがなお画面を支配しているとはいえ、いっきに説明的要素を加えて主題の物語性を強めている。つまり、斐伊川や鳥髪山それに櫛名田比売を描き加え構図も整えることによって、完成作は素尊の周知の伝承を一層視覚的に理解し易い形へ変えられているのである。いわば観者を前提にしたかのような、或は自己の純粋に絵画的な関心を抑制したともいうべきこの改変は、おそらく、ミュンヘン・アカデミーに学んだ原田が、自己に課した洋画移植の使命から出たものと見るべき様に思われる。何故なら、わが洋画壇はこの時点で未だ真に歴史画と呼ぶに足る作品を持っていなかったからである。

さて、最初に述べたように「素尊斬蛇」制作に関わる直接的文献資料は目下の処極めて乏しい。二・三の雑誌に授賞記事を見出すこと、それにこの作品が病床で制作された（三宅克己、大下藤次郎回想、伊藤快彦宛原田書簡）等を知る位である。その原田の病状は既に二年前には明瞭な姿を顕わし、「素尊斬蛇」を発表した同年十月の明治美術会秋季展覧会（第七回）へも風景画三点を出品してはいるものの、鷗外をして「彼の原田直次郎氏の如きも、不幸にして病褥にあるに非ずば、いかでか二・三の大作なからむ」（「我国洋画の流派に就きて」）と嘆かしめる状態にあった。つまり、「素尊斬蛇」は原田が最後の余力を絞って世に問うた作品であり、しかも前回の勧業博に続いてここでも肖像や風景画でなく、いわゆる構想画を制作発表した処に原田の面目があったのであり、同時にそれは彼の洋画観を如実に示すことをともなったのである。

原田が「いつも眼を高處に注いで」いて、帰国後は「モニュメンタルな大作を志し」ていたとは鷗外の言葉であり、「畫に就いては如何にも思想の高い人で、又思想と云ふことをば技術よりも餘程重く見て居った」（黒田清輝）とされる原田の理想は、何よりも構想画の実現にあったといっていい。それは、原田がよく「強いて油絵画家をあげれば芳翠位なもの」と語り、山本芳翠の「浦島」（明治二十八年）を「理

想画を画くという企てが面白いと感心して居られた」という三宅克己の回想や、最後の門下生となった大下藤次郎が日記に「自然に近く且つ高尚なる宗教的歴史画を描かんと思ふ。何ぞや神代の歴史なり」（二十八年十二月三十日）と、原田からの感化を強く示す内容を記していることからも窺えるものである。しかも、原田にとっての構想画（理想画）とは、彼が帰国直後龍池会席上で演述した「絵画改良論」―論旨は伝統的絵画と西洋画の折衷作為が如何に無意味であるかということにあった―で掲げた「歴史画」（「古今ノ歴史戦争神学高名ナル詩文等ニモトズキタル絵画」と定義）とおそらく同義語であり、なかんずく「神学高名ナル詩文等」に基づいた絵画であったことは、彼の二点の構想画そのものが示唆するところであろう。

歴史画を原田が重視したのは、ミュンヘン歴史画派の流れをくむガブリエル・マックスに師事したことに直結することはいうまでもないが、加えて原田の場合、繰り返し描いた竜（竜蛇）のモチーフに見るように、彼がミュンヘンで浪漫的歴史画に浸りながら、同時に時代の趣味として世紀末的主題、黙示録的テーマへも強い関心を抱いていたであろうことは疑いもなく、このことこそ前記二点の構想画を考える上で極めて重要な鍵となるであろう。つまり、「騎龍観音」と「素尊斬蛇」は、原田がそのようにミュンヘンで培った絵画的理想を日本的主題に託して実現しようとした作品に他ならないと言える。しかし、前者が〈「小天地想」に基き空想に発した〉（鷗外）作例であり、敢えて言えば竜そのもののイメージが画面を支配しているような、純粋に原田の絵画的関心が吐露され新帰朝の高揚した精神を伝えているのに対し、五年後の後者にそれはなく一種イメージの退行ともいうべきものが感じられる。それは、原田が既に病床にあったということと全然無縁では勿論ないであろうが、それ以上に、彼が帰国後次第に日本画壇の現状と深く関わっていく過程にこそ問題が潜んでいるのであって、換言すれば、明治洋画の未成熟さが前者のイメージを後者へと有効に持続させることをしなかったと見るべきように思われる。

参考文献抄

〔単行図書〕

原田先生記念帖　原田直次郎氏記念会　小柴　英　明治四十三

原田直次郎年譜　森林太郎

計音を得た時の雑感　三宅克己

十年後の追懐（無題回想記事）　久保田米斎、伊藤快彦、大下藤次郎、小林万吾、薗田三佐雄、合田清、長沼守敬、安藤仲太郎、松岡寿、長原孝太郎、黒田清輝、幸田成行、森、三宅、長原、合田、本多錦吉郎　明治四十一

余談　大正十二年他

追悼洋風美術家小傳　山本芳翠

鷗外全集「原田直二郎に與ふる書」他、近代日本美術の研究　長尾一平　昭和十五

絵画の領分　限元謙次郎　〃　三十九

〔定期刊行物〕　芳賀徹　〃　五十九

絵画改良論　原田直次郎　竜池会報告三十一

美術展新画ノ部原田少将像　日本美術協会報告一

油画展覧　絵画叢誌十二（他に十三、十六、三十七に記事等）

本会創立記事　明治美術会第一回報告（他に三―八、十回に記事等）

原田直次郎氏逝く　美術評論二十四

故原田直次郎追悼会　美術新報九―二

故原田直次郎が事ども　〃　九―三

原田君のことなど（私の画学生時代）　アトリエ三―九

私の学生時代　美術新論三十一

森鷗外と同時代美術　上・中・下　文学四十、四十一

南独にひっそり若き原田の肖像　長原孝太郎

原田直次郎とドイツ婦人画像 C. Pfaff　小林万吾

護国寺の『騎龍観音』　芳賀徹

原田直次郎の書簡　W、シャモニイ

原田直次郎　騎龍観音　朝日夕刊一九八〇・九・九

修理前の状態および修理の経緯　横川善　鷗外二十九

原田直次郎と近代油画技法　尾埼尚文　護国寺二十六

三輪英夫　絵百九十

創形美術学校修復研究所報告一

渡辺一郎

歌田真介

原田直次郎関係年譜

文久三年（一八六三）
・八月三十日岡山藩士原田一道（一八三〇―一九一〇、のち陸軍少将、男爵）の次男として東京小石川柳町富塚順作宅に生まれる。母は富塚順作の長女あい（のち継母茂子）。父一道は当時岡山藩主池田長発一行の随員として滞欧中。兄は豊吉（一八七四―九四、のち東京大学理学部教授、理学博士）。

慶応二年（一八六六）
・麻布市兵衛町に遷る。

明治元年（一八六八）
・浅草鳥越池田侯の邸に遷る。六月岡山に遷る。

明治二年（一八六九）
・三月東京浅草鳥越池田侯の邸に遷る。

明治三年（一八七〇）
・三月大阪東区島町に遷る。
・大阪開成学校に入り、フランス語を学ぶ。又保田東潛に漢学を学ぶ。この頃の友人に能勢静太（のち陸軍二等軍医、医学博士）。

明治六年（一八七三）
・九月東京駿河台北甲賀町に遷る。
・十月東京外国語学校に入り、フランス語を学ぶ。

明治七年（一八七四）
・深川富岡門前町に遷る。この頃山岡成章に画を学ぶ。
・三月東京外国語学校仏語学下等第五級在学、同級生に榊順二郎、伊沢信三郎など。
・この年、兄豊吉渡独（明治十六年帰国）。

明治九年（一八七六）
・神田区裏猿楽町に遷る。

明治十四年（一八八一）
・八月三日大久保政親の次女さだと結婚。
・東京外国語学校の業を卒ふ。（「原田先生記念帖」）

明治十五年（一八八二）
・七月十日東京外国語学校仏語学を卒業し卒業証書を授与さる。
・七月箱根に遊び、同地で写生中の高橋由一、浅井忠、小山正太郎らに邂逅、帰京後直ちに由一の天絵学舎に入門。「当時の二十四五人の書生仲間では、原田君の画は中位で、綿密で冴えないという方であった。」（安藤仲太郎）

明治十六年（一八八三）
・三月天絵学舎高橋源吉に就き西洋画法を専修するに至る。
・七月十三日長女壽生まれる（同三十五年医師梅村助松に嫁ぐ）。
・この頃から長原孝太郎と交友。

明治十七年（一八八四）
・一月九日美術研究を目的とする独国自費留学の免状発給され、二月十六日メンザーレ号で出国。ヨーロッパ兵学視察の大山巌ら一行と同船。
・四月二十一日ミュンヘン・アカデミーに入学、ガブリエル・マックス Gabriel Max（一八四〇―一九一五）教授に師事する。ミュンヘン留学とマックスへの師事は、兄豊吉と松岡寿の示唆による。
・この年、画友エクステル J. Exter（一八六三―一九三九）筆の油彩画「原田直次郎像」あり。

明治十八年（一八八五）
・この年木炭習作「男肖像」（「美術新報」九―三）。

明治十九年（一八八六）
・三月森鷗外を識る（鷗外「独逸日記」初出は三月二十五日。
「二十五日。畫工原田直二郎を其藝術學校街 Akademiestrasse の居に訪ふ。直二郎は原田少將の子なり。油畫を善くす。」以下、同日記中原田に関する記事は、五月二十九日、八月十五日、同二十日、同三十一日、九月六日、十月一日、同九日、同二十三日、十一月二十二日、同二十二日の都合十一回）。
・七月油彩画「風景（コッヘル村の図）」（自筆裏書）。
・八月十五日、マリイ Marie Huber との居宅を Landwahrstrasse に定める。同月三十一日マリイと避暑と写生を兼ね Mittelward に赴き十月一日 Kochel より帰る。
・十一月二十一日「ヲルフの旗亭」で鷗外らに送別会を催され（この時同席のマリイは「原田の遺子を妊めり」鷗外）、翌二十二日午前七時十五分ミュンヘンを去り、その後スイスを経てイタリア（ヴェネツィアで長沼守敬と会う）へ赴きパリへ向う。
・この年、油彩画「エクステル像」「靴屋の親爺」（共に署名・年記。「独逸日記」十月九日の項に「原田を訪ふ。その作る所のミッテンワルド及コッヘルの圖を觀る。近衛老公、岩佐、濱田等の肖像半ば成れるものあり。」と記す。「ドイツの少女」もこの頃か）。この年七月長沼守敬ヴェネツィアよりミュンヘンを訪ねる（十五―二十七日）。

明治二十年（一八八七）
・一月パリ美術大学校へ転ず。パリでは合田清と交友、黒田清輝も公使館夜会の席上原田を識る。
・七月帰国。東京神田区裏猿楽町の父一道邸に入る。帰国後長沼、安藤仲太郎らが原田を訪ね、安藤とは共に写生をする。
・十一月竜池会会員となる。
・十二月四日竜池会新古美術品展示（上野、華族会館）に油彩画「原田少将像」を出品（「日本美術協会報告」一）。同月、「絵画改良論」発表（「竜池会報告」三十一に収載）。

明治二十一年（一八八八）
・二月二十三日原田の発起による油画展覧会（―三月二五日、横浜パブリックホール）に出品（「絵画叢誌」十三）。
・四月十一日明治二十一年美術展覧会（―五月三十一日、日本美術協会列品館）に油彩画「辻新次氏肖像」「人間至憾図」を出品。同月「絵画叢誌」第十三巻に挿絵二図（「裸体骨格ミケルアンジェロ」）。
・七月「絵画叢誌」第十六巻に挿絵一図（「人物草稿　ラファエル」）
・十月十七日次女福（明治四十年八月七日工学士喜多村正夫に嫁ぐ）生まれる。
・十二月本郷区六郷六丁目三十一番地に画室を新築し移居する。
・この年、房州館山に遊ぶ。また、二月頃水野正英が最初の門下となり、ついで小林万吾、伊藤快彦が入門。原田は新築計画の段階で画室を鍾美館と名づけ、画塾設立の意向を固めていた。伊藤によると、森岡健夫、吹田洋一郎、町田某、佐藤岩太郎、脇水彦次郎、茨城雄名治、安松富士太郎、石田裕子、平井時子らが門人の名として挙がる。

明治二十二年（一八八九）
・一月二十五日東京府認可の鍾美館設立。
・五月一日明治美術会第一回発起人相談会（神田青柳楼）に出席、ついで八月二六日の第二回発起人相談会（柳橋万八楼）にも出席し、この間明治美術会創立会員となる（以下明治美術会関係事項は同会報告及び出品目録）。
・八月二十五日明治美術会展覧会事務委員、同学術委員に当選。同月房州館山に遊び、その後箱根へ赴く。館山で共に止宿した合田によると、この時発病の症状を示すことがあったという。同月「於母影」（「国民之友」第五十二号夏期付録）に扉絵（合田清版）。
・十月十九日明治美術会展（―十一月三日、上野不忍池畔馬見所、第一回展）に油彩画「房州明金ヶ崎之景」「肖像」「収穫」を出品。
・十一月「油画漫評」（「しがらみ草紙」第二号。のち「観馬臺の展畫会」）と題し、「猴崖樵夫」の号を用い鷗外と明治美術会展の合評を発表。
・十二月七日明治美術会評議員となる。
・この年、日本美術協会主催展に「已に晩し」を出品（鷗外）。

明治二十三年（一八九〇）
・一月鷗外「舞姫」（「国民之友」第六十九号付録）に挿図。
・三月七日第三回内国勧業博覧会審査官（十月九日免官）となり、同博覧会（四月一日―七月三日上野公園）に油彩画「観音」（騎龍観音）「毛利敬親肖像」を出品、後者で三等妙技賞を受ける。「騎龍観音」を含め外山正一、鷗外、林忠正の間で画題論争を起る。
・四月「又饒舌」（猴崖子、「つき草」同二十九年に収載）を国民新聞に発表。
・十一月十五日明治美術会第二回展（―十二月四日上野、元華族会館）に油彩画「土艦エルドグロール」「習作人物」（二点）チョーク画「橘姫」を出品。
・この年八月頃、日本赤十字社病院（青山）御座の間を飾る皇后肖像の油彩画制作の候補三名中に挙げられるが辞退する（鷗外）。

明治二十四年（一八九一）
・一月鷗外「文づかい」（新著百種）に挿図、「国民之友」第百五号（―百五十八号）表紙絵。
・五月二十日明治美術会第三回展（―六月三十日、上野公園元華族会館）に油彩画「人物」「三月」「緋の袴」を出品。
・十二月七日久保田米斎鍾美館に入門。同十日長男大作生まれる。同十八日付伊藤快彦宛書簡。
・この年、護国寺に「騎龍観音」を奉納。夏房州に遊ぶ。

明治二十五年（一八九二）
・一月八日長男大作歿。同月、三宅克己、和田英作鍾美館に入門。同月、米国世界博覧会（シカゴ万国博）出品作として油彩画「浅草寺」「芝公園徳川霊舎」を申込む（翌年の万博へは結局不出品）。
・三月二十五日明治美術会第四回展（―四月三十日、芝公園弥生館）に油彩画「某氏肖像」「横井小楠翁肖像」を出品。
・七月「国民之友」第百五十九号（―二百六十六号）表紙絵。

明治二十六年（一八九三）
・四月十三日大下藤次郎、初めて原田を訪ふ（翌年四月四日正式に入門）。
・四月三十日明治美術会第五回大会で評議員に当選。
・九月病に罹る。
・十月六日次男龍蔵生まれる。同二十八日旧天絵学舎社中主催洋画沿革展覧会（―十一月十二日築地近源亭）に油彩画「高橋由一翁像」を出品。
・この年、七月帰国した黒田と交際する。シカゴ万国博鑒査官となる。

明治二十七年（一八九四）
・九月二十五日東京府認可の明治美術学校設立され、絵画科担当教員となる。
・十月十一日明治美術会第六回展（―十一月三十日上野旧五号館）に油彩画「高橋由一翁肖像」を出品。
・十二月一日兄豊吉歿。
・この年、鍾美館閉鎖。

明治二十八年（一八九五）
・一月四日三男一三生まれる。
・三月十二日伊藤快彦宛書簡。
・四月一日第四回内国勧業博覧会（―七月三十一日京都）に油彩画「素尊斬蛇」（「素盞嗚尊」とも）を出品し妙技三等賞を受ける。
・十月十日明治美術会第七回展（―十一月十八日上野旧五号館）に油彩画「秋の景」（二点）「夏の景」を出品。

明治二十九年（一八九六）

・一月「めざまし草」巻の一（―十二）表紙絵。
明治三十年（一八九七）
・一月「めざまし草」巻の十三（―二十四）表紙絵。
・四月十一日明治美術会第八回展（―五月二十五日上野旧五号館）に油彩画「海浜之景」を出品。
明治三十一年（一八九八）
・三月十四日、自邸で大下の渡豪を送別する。
・四月十九日、自稿「都筑政論」を鷗外に示し削正を請う。
・八月三十日神奈川県橘樹郡子安村一七七八番地へ移転し療養につとめる。
・十一月二十一日付長原孝太郎宛書簡。
・この年、油彩「安藤信光像」。
明治三十二年（一八九九）
・十二月二十六日午前八時四十分脊骨労及肺結核のため東京大学第二付属病院で歿。享年三十六。同二十八日谷中天王寺に葬る。法名「隆光院殿清宇直道居士」。

〔付記〕
明治四十二年十一月二十八日森鷗外、黒田清輝、青山胤道、徳富猪一郎、長沼守敬、正木直彦らの発起で原田直次郎十四回忌記念会（上野精養軒）が催され、翌年一月『原田先生記念帖』が刊行される。

図版要項

一　白麻地波文様胴着　正面（原色刷）　栃木　輪王寺蔵
二　同　背面　部分
丈九〇・五cm　裄六七cm　袖幅三一・五cm　袖丈二九cm
三　三つ葉葵文様藍型染胴着　正面　同
四　同　背面　部分
丈九一cm　裄六五・五cm　袖幅三四・五cm　袖丈三六cm
五　金入繻珍胴着　背面　部分　同
背面左寄上部　二九×三五cm部分
一―五　神谷榮子「日光山輪王寺伝来胴着三領並びにそれらの修理及び復元模造について上」参照
六　阿弥陀如来立像　正面　滋賀　玉桂寺蔵
七　同　a左側面　b右側面
八　同　a頭部正面　b頭部左側面　c背面
木造　漆箔　玉眼　像高九八・七cm
六―八　三宅久雄「玉桂寺阿弥陀如来像とその周辺」参照
九　原田直次郎筆　素尊斬蛇画稿　明治二十八年頃　岡山県総合文化センター蔵
油彩・画布　竪七七・五cm　横五三・三cm
九　三輪英夫「原田直次郎筆　素尊斬蛇画稿」参照